

# 日本メキシコ学院日本コースにおける総合的な学習の時間と実践

前日本メキシコ学院日本コース 教諭

愛知県一宮市立千秋東小学校 教諭 梅村 雄樹

**キーワード：総合的な学習の時間、国際理解、現地理解**

## 1. はじめに

2014年4月より、メキシコの首都メキシコシティにある日本メキシコ学院日本コースで、指導する機会を頂いた。ここは日本とメキシコの両政府が合意をして建設された日本人学校であり、他の日本人学校とは異なる特徴がたくさんある。その1つが、同じ敷地の中で日本人とメキシコ人が一緒に勉強をしている点である。日本コース約150人とメキシココース約850人の1000人近い児童生徒と一緒に勉強をしており、総合やクラブ活動、学校行事では両コースが一緒になって行うことも多い。その中で総合的な学習の時間を利用した「国際理解」の実践を紹介する。

## 2. 日本メキシコ学院での取り組み

日本メキシコ学院は、日本・メキシコ両国民の相互理解の増進と教育文化の交流を図り、人類の連帯感を育み、世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな、かつ、両国民にとって有為な人材を育成することを目的とし、建学の精神もここにある。

この精神に基づき、両コースにおいて交流授業や行事が行われている。

## 3. 研究実践

### (1) ねらい

日本コースでは日本文化を紹介する時間として、総合的な学習の時間を利用して交流授業を行っている。しかし、児童生徒の意識調査をすると、交流授業に対する意欲は、学年が上がるにつれて下がっていく傾向が見られた。

この原因として意識調査をすると中学部2年生において以下のような意見が出てきた。

- ・交流授業のめあてが非常に難しい。
- ・スペイン語でのコミュニケーションがうまくできない。
- ・相手にうまく意思を伝えることができない。

このように、学年が上がるにつれてコミュニケーション能力が必要になるため、特に言語によって意思を伝えることに対する抵抗感が高まっていると感じた。

### (2) 研究の仮説

1年目に小学部4年生を担当した時は、一緒にソーランを踊り、運動会でも披露をした。この時の児童は交流授業に対して非常に意欲的であり、言葉よりも身振りなどのボディランゲージを利用してコミュニケーションをとっていた。これが学年が上がると言葉による指示に代わることが交流授業に対する抵抗感になっているのではないかと考え、以下の仮説を立てた。

『個に応じたコミュニケーションの方法を取ることで、意思疎通を円滑に行うことができ、充実した交流授業をすることができる』

この仮説に基づき、2年目に中学部2年生、3年目に小学部5年生において交流授業を実践した。

### (3) 実践内容

#### ① 中学部2年生における実践

中学部2年生は15名の生徒が在籍をしていた。このうち両親の一方がメキシコ人である生徒が2名、他にメキシコで生まれ育った生徒が2名の合計4名は日常的にスペイン語を利用しているので日常会話には問題がなかった。残りの11名は、メキシコに来てから1年未満という生徒4名を含めて、スペイン語で日常会話をするのはやや厳しいレベルであった。しかし、本クラスの生徒の特徴としてアメリカやフランスから転校をしてきた生徒が多く、英語検定2級程度の力を有している生徒が6名もいた。そこで交流授業をするにあたり、これまではスペイン語を利用してコミュニケーションをすることが前提であったが、その子の得意な言語を利用すれば何を使ってもよいという条件にして交流授業を行った。

初めての交流授業では、「無人島に行く時に1つ持っていくなら何を持っていくか」というテーマでグループ討論を行った。日本コースの生徒は食料やテントといった命を守るグッズの選択が多い一方で、メキシココースの生徒は人形やぬいぐるみといったものを選択し、お互いの考えからの違いに驚いている生徒が多かった。互いの価値観を話し合う中で、違いについて理解をすることができた。

この時の会話の手段として、スペイン語で話している子と英語で話している子がいた。メキシココースでは日本語の授業も行っているため、日本語がある程度話することができる生徒を介して通訳をしてもらう生徒もいた。言語を固定しないことによって自由に話すことができ、以前よりも会話の多い交流授業となった。

この交流授業を受けてお互いの文化交流も行った。クリスマスの時期にメキシココースの生徒からメッセージカード作りの提案を受けて交流をしたので、お返しとして、日本伝統の年賀状作成を行った。初めは、年賀状の書き方や筆の使い方を説明するのに非常に苦勞をしていたが、ここでも英語やスペイン語、さらには実際に、筆を使って見せるなど多様なコミュニケーション方法をとることによって書き方を説明することができた。

#### ② 小学部5年生における実践

3年目に受け持った小学部5年生は、13名と少人数ながら家庭での言語がスペイン語である児童が6名、アメリカなど他国からの転入組が4名いた。一方で、メキシコに来て半年も経過をしていない児童が3名と、これまでの生育環境がばらばらな児童が集まっていた。

5年生では伝統的に書写交流を行うことになっている。事前の意識調査では、5年生の児童は楽しみにしている児童と、不安に感じている児童の2つに意見が分かれた。不安に思っている児童はコミュニケーションのことを心配している子が多く、特に筆の動きをどのように伝えていくのか、事前に練習をしてもうまく説明できない子が多くいた。

そこで、小学部5年生では言語によるコミュニケーションだけでなく、ツールを利用したコミュニケーションも利用をすることにした。これまでも書写交流でコミュニケーションカードを活用していたが、さらにこのカードに不足していることをさらに書き加えたカードを用意した。カードも文字情報と視覚的情報を併用させ、言葉が話すことができなくても指を指すだけで意思を伝えることができるようにした。

交流当日、児童はカードを有効に活用して、筆の持ち方から筆の運び方を上手に教えていた。絵とスペイン語で伝える児童、英語で話をする児童、さらにはカードを活用しながらメキシココースの児童の手をいっしょに持ってなぞる児童など、一人ひとりの児童ができる力の範囲で活動をしていた。書写交流は何度か実践をしたが、繰り返していく中でコミュニケーションの取り方もうまくなっていったのが教師の目から見てとることができた。

交流後の児童の感想を読んでも、「楽しく活動することができた」「スペイン語は話せなかったけど、習字の書き方は教えることができた」など準備したコミュニケーションツールを有効に使った感想が並んだ。



〔コミュニケーションカードを活用した指示〕



〔言葉が通じないときには一緒に筆を持って活動〕

#### 4. まとめ

日本メキシコ学院は、世界でも珍しい現地の学校と日本人学校が一緒になっている学校である。国際性豊かな人材の育成をするのにこれほどよい学習環境はないが、一方で、どのようにして2つのコースをつないでいくのか、児童生徒の交流、教師間同士のコミュニケーションのとり方を含めて常に大きな悩みであった。

今回は、その中でも児童生徒の交流がどのようにしたら円滑に進むのかを考えて実践をしてきた。日本メキシコ学院では、これまでの長い歴史の中で先輩の先生方が知恵を絞り、さまざまな実践をしてきた。自分もこれまでの実践を踏まえながら、この時担任をした学年、児童の実態に合わせて工夫をして取り組んでいた。今後も2つのコースがあるという特性を生かしながら、国際性豊かな児童生徒を育てるのに最適な教育方法を追求し実践してほしいと思う。